

第6回「防災ボランティア活動検討会」

日時 平成18年8月25日（金）10:30～16:30

場所 名古屋大学環境総合館

2. 分科会

分科会1「防災ボランティアの安全衛生について」

1. 経緯説明

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

安全管理、安全衛生管理など、いろいろな言葉が多用されていますが、分科会1は「防災ボランティアの安全衛生について」という分科会名だということでご理解ください。

議事進行次第ですが、岡野谷さんからの話題提供、質疑応答を行い、岡野谷さんの話題提供に基づいて、この部会として出すべき成果物について具体的なイメージを共有するための話し合いを行います。その具体的なものの一つとして、「寒冷地におけるボランティア活動時の安全衛生について」ということがかなり大きな問題として浮き彫りとなっていることから、その辺について討論を進めていきます。途中で4階の福和研究室のさまざまな成果を見学して、今年度の災害ボランティア活動も含めて、活動中の安全衛生における経験、課題について話し合いをします。

資料は、分科会1「防災ボランティアの安全衛生について」の資料、縦版の「防災ボランティア活動の情報・ヒント集」、横版の「防災ボランティア活動の情報・ヒント集」、それから、カトリーナのパワーポイント資料です。今日は主に、カトリーナの資料と分科会1資料を使って話を進めていきます。

分科会が終わったあと、全体会に戻って分科会報告を行わなければいけません。最後の全体会で報告して下さるかたを最初にお願いしたいと思いますが、澤野さん、よろしいでしょうか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
分かりました。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
では、岡野谷さん、前回に引き続き話題提供ということでよろしくお願いします。

話題提供1：岡野谷純氏（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

阪神・淡路大震災から10年以上たち、防災ボランティア自体がいろいろな被災地で一つのシステムとして動き始めています。その中で、防災ボランティアの皆さんがどのように現地で活動していけばよいか、また、どのように使っていけばよいかということについては、各センター、自治体が非常に考えていろいろなプログラムやシステムを作って皆さんに提供しています。ただ、現場に入っているボランティアの皆さんがそれぞれ考えている安全管理、あるいは衛生的な分野についてはどうかというと、まだまだそういったところまで目が届いていないし、それはボランティア自身が考えることであって、自治体、ボランティアセンターなどが考えることではないと考えているところが多々見受けられるのが実情です。

ボランティアを派遣する私たち、あるいは個人で入っていく人たちが、自分自身でこれは危険だ、こういったことを考えなければならない、この場所はこういう場所だから自分はこういう装備をしていかなければ

ならないと考えるのは当たり前だという考え方も、確かにあるわけです。それをしなければいけないことも分かっています。ただ、それを全員が知っているかという点と決してそんなことはないわけですから、その教育、訓練の具体的なシステムを考えていかなければいけません。それから、それが分からないで入っていく者、あるいは、考えて一生懸命装備をしていっても被災地はもっと違うということを認識できていない者がいるという現状を踏まえると、現場でもボランティアの皆さんに対して、こういったことが必要だ、こういった装備をしよう、こういった衛生管理をしようと言うことは、やはり必要なわけです。

私ども日本ファーストエイドソサエティは、阪神・淡路大震災以降、いろいろな場を使ってそういったことを訴えてきており、安全衛生について、我々だけでなく多くの皆さんと一緒に広く考えたいということで、フォーラムを開催して幾度となく皆さんと問題を共有してきました。そして今回、内閣府の防災ボランティア活動検討会の一つの部会として、さらに広い見地をお持ちの皆さんと一緒に、研究、勉強していける場をいただいたというのが、これまでの経緯です。

テーマとしては、いろいろな皆さんにいろいろな方向から見ていただいて、安全衛生について考えていくことが一つです。実際には、洙田先生にお作りいただいた安全衛生マニュアルの中身をもう少ししっかりさせて冊子を作り、それを一つの成果物にしていきます。併せて、寒冷地におけるボランティア活動の安全衛生が今すぐ必要だろうということで、それも一緒に作っていきましょうということが、第1回の会合でオーソライズされた部分です。

さらに、お手元に資料があるカトリナ・プログラムの15分ほどで見られるようなファイルになっていて非常によくできたものなので、これを訳そうということもテーマに挙がっています。今、半分ほど訳したところですが、ただ訳すだけでなくこれをどう日本で応用するか、あるいはこのコンパクトな作り込みを私たちがこれから作る安全衛生マニュアルでも実現していこうということで、成果物としてこういったパワーポイントの資料を作っていくことも一つのテーマにしてはいかかかということも、前回、提案として挙げてあります。

部会のねらい、今後どのようにやっていくかについては後でお話ししますが、成果物のイメージとして、立場、人、活用する場面を正確に決めていこうということで進めていただければと思います。

経緯としてはそういうことですが、もう少し人を呼び込んで、広く考えていかなければいけないと思います。また、これまでに安全衛生に関して各ボランティアセンターでいろいろやっているところもあると思うので、その辺の資料を少しまとめていかなければいけません。もう少し資料を集めていくことも含めて、この部会で実現していければいいかと思います。

2. 成果物のイメージ

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

これまでの流れの補足で、どんなことをやってきたか、この部会として目標にしたいものについて、説明がありましたが、ほとんどのかが比較的定期的に顔を合わせて意見を交わしてきているので、これについて問題はないと思います。

先日、今日の部会に向けての準備の話し合いをした中で、成果物はだれを対象に、どんなものを作っていくのか、その辺のイメージをきちんと固め合っていこうということがありました。さまざまな災害の多様性にどう対応しながら共通項を抽出していくのかというイメージを共有することが必要だと思いますし、だれがどんな場面で使うと想定するかによっても書きようが全然違ってくるので、その辺の整理、そして、そのためには使いがってが非常に重要なわけで、そういった3点から自由にご意見を出していただけたらと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

安全衛生については、ボランティアなど外部から被災地に行く人たちだけの話ではなく、被災地で生活している住民の人たちにも共通の大切な要件だと思います。地元では、保健所が住民に向けて、水害の後の不衛生な状況から、マスクをしましょう、手を洗いましょうなどと市民広報を実施していますが、他都市から行くボランティアは、そういう衛生に関する情報に接することはできません。従って、ボランティアで来る方々に対しては、衛生に関して必要な装備についての初期情報を出すことが大切と考えます。被災地をよく

知っている先発のボランティアなり、現地ボランティアセンターなりが情報を出して欲しいと思います。その際、地元の保健所が住民に出す情報と、ボランティアに出される情報内容に、あまり差がないことなど、共通項が必要だと思います。

今は所要の情報をだれが考えるのか、だれが出すのか、その情報を使うのは誰かによって、情報内容の差異や必要とする装備に対する考え方にばらつきがあり、情報の受け手に戸惑いがあります。地元保健所と、ボランティアセンターの出す衛生に関する情報の斉一を期すことにより、信頼性を増すと考えます。その際、ボランティアセンターが出す情報と地元の保健所や災害対策本部が住民に出す情報とのすり合わせを、誰が担えるのかが課題としてあるかと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

ボランティア活動の安全衛生管理を発端としてスタートしているわけですが、当然、住民も似たような活動をしているわけで、同じ問題が被災地の住民のかたがたにも発生しているのだから、現地災害対策本部あたりがきちんと使える形のものがないというご意見ですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

災害対策本部はボランティアに来る人のことを切り分けてしまっているのでは出していないだけだと思うので、住民のかたに対してアピールしていることはボランティアに対しても同じなのだから、そこまで含めて情報提供してくださいということを要望として提言していくことも一つの安全衛生になります。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

三条市の場合は地元の保健所が住民向けに出したのが早かったですよね。それをボランティアセンター側が活用して、足したり引いたりしていくという考え方もあるかなと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

先ほど岡野谷さんから既存の資料収集という話が出ましたが、ボランティアセンターあたりが作ったものだけではなく、保健所や現地の医療機関などが作っていたとすれば、その辺もターゲットにしたほうがいいわけですね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

保健所も災害対策本部の中の一構成員ではありますが、保健所の担当課長レベルで方針を決めて動けると、行動は早いです。保健所は住民の顔が見える機関だから早いともいえます。「ボランティアに来る方々に向けても同様のものを出したいのだけれど、住民向けにどういうものを出していますか、出す予定ですか」と問うなら、きっと連携は可能と考えます。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

保健所の場合は、災害時には伝染病対策という使命があるので、絶対にそれに関しては出さなければいけないのですが、やはりボランティアに関しても責任はありますよね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

そうすると、過去の新潟水害や福井水害のときにどういう活動をしたかという資料は、各地域の保健所には必ずあるはずだということになりますね。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

あったはずだとは思いますが、実際ないことも多いのです。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

どの時点に出したかですよね。問合せをするなら回答を得られると思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

対象については、最初に指導者向けのものを作らなければいけません。学校の教材もそうですが、まず教員向けのものを作って、教える人たちとのコンセンサスができてはじめて一般向けになります。いきなり一般向けということで専門家間の意見の相違を調整しないままやると、あのマニュアルはいいかげんだとか、あのマニュアルは何だとなってしまうがちです。逆に一般に向けてやるものを専門家どうして深く話し合ってしまうと、共通項しか出てこなくてすごく一般的になってしまう危険がある。そういう意味ではボランティア活動にある程度絞って指導者向けに作れば、我々の領域で自由に検討できると思います。

あくまでも我々は問題提起するだけで、それをオーソライズするのは国の仕事と割り切ったほうがいいのではないのでしょうか。とりあえず、一般向けでなく指導者向けに、ボランティア活動を指導する人たちは最低限こういう安全管理を知っておかなければいけないというコンセンサスを作って、その次に一般向けのものを作る。一般向けはどうしても分かりやすくなければだめなので、指導者向けの詳しいものを作ったうえで、次に一般向けをオーソライズしたほうがいいと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

指導者向けを作れば、一般向けの情報をどういう形で出すかという方法論でいけるかなと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それは逃げの意味も含めて対象をボランティア活動に限定する必要があります。住民を含めてしまうと地域特性が出てきて地域によって全然変わってしまうので、かなり絞る必要があります。後で寒冷地の話もありますが、例えば寒冷地のボランティアの話と一般の水害の話と地震は全然違うので、防災計画ではないけれど風水害編、地震編、事前予防編、寒冷地編などとしてはどうでしょうか。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

寒さ対策や暑さ対策は大変イメージしやすいと思うのですが、水害の場合、例えば東京の渋谷の水害と、地方山間部の水害とでは、土砂が入るか入らないかなど、状況が違いますよね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今、澤野さんから出た指導者というのは、ボランティアが集まったところでいろいろと仕切る立場というイメージはできますが、それをボランティアセンターや行政の災害対策に関係してくるセクションなどにいる役人とするのか、もう少し下のボランティアリーダーとするのか、もっともっと大きく上のほうとするのか、その辺のターゲットをもう少し明確にするようなご意見が出たらと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

どうしてもレベルという点では抽象的ですが、少なくとも一般的にはボランティアをある程度動かす立場の人は、それが小規模集団なのか大規模集団なのかは別として、こういうものを知っていなければだめだという位置づけになると思います。センターをやる人や、ボランティアバスでも何でも、とにかくボランティアを率いる人は必須と言ってもいいでしょう。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

もう一つ、ボランティアの受け入れやボランティアセンターの立ち上げを、事務局という形で社会福祉協議会にゆだねている自治体は多いのですが、衛生に関する情報を事務局に先ず入れていって、事務局名で情報を出してもらうことによって、衛生に関する考え方の社会化ができるという考え方もあります。でも、ボランティアには自分が指導者だと思っている人が多いので、その作業に不慣れ、不得手の懸念がある。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

自覚のある人はみんな指導者でいいのではないですか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

自覚のある人たちが皆が学べばそれはそれで逆にはいいわけですが、ただ、ボランティアセンターは既存でもあるわけで、そこに「こういうものを作りましたからどうぞ」と渡すのは本末転倒になってしまうので、上のほうには「こういったものを作ったのでご利用ください」レベルで、今言ったボランティアバスや一つのグループのリーダーぐらいをターゲットにしたほうが作りやすいのではないかと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

作って、指導者向け講習をやるとなると、講習に来たい人はみんな指導者なのでしょうが、標準化していくうえではある程度対象は書いたほうがいい。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

センターではなく、センターの下でやっていくグループリーダーぐらいをターゲットにしていって。

宇田川（神奈川県災害ボランティア支援センター・サポートチーム）

現場と直結していて、しかも大勢の人たちを束ねる。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

実際、長野県岡谷市でもそうだけど、安全管理を担うのは、ボランティアセンターの人というよりも現場に行くボランティア班の班長さんです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それをセンターが統括できるかといったらそうではないから、本当にそのレベルの人たちに理解していただく。多分、いろいろなことを個人個人は理解していると思います。だから、それを集約したものであるという位置づけにしないといけないのかなと。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

リーダーでも、マッチングの段階で仕切るリーダーと、現場のリーダーがあります。そもそも送り出す手前で止めなければいけないところと、現場に出てから先で気をつけなければいけないところがあるので、その辺も分けなくては・・・。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

そうすると今のボランティアセンターの話も入ってくるわけですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それは現場が引き揚げてくるという判断をできるようにすればいいわけです。最終的にはもちろんセンターに渡すものになりますが、最初からそこをターゲットにしてしまうと、やはり「そんなものは持っています」のような部分がどうしてもあるわけですし。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今日はせっかく傍聴のかたも見えているので、よろしかったらご自由にご発言ください。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

ご紹介します。左は市川市消防局の石原房江さんです。女性救急救命士の第1号で、係長級の救急隊長です。その隣は東京消防庁の清水真知子さんです。部隊幾つかを管理する出張所長さんです。二人ともまさに

日常業務の安全管理の元締めをしています。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それから、大谷さん、学生のボランティア活動をしている I V U S A の O B です。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

そうすると、各地で行われているボランティアコーディネーター研修にもいろいろな中身がありますが、とりあえずその辺で使われるような資料というイメージでも、一つはいいかと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

もう一つは、ゆとりの有無という議論はあっても、やはり現場でやる必要はあるのでしょうね。今は各人の努力に完全に任されている状況ですから。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

前回の会議でも申し上げましたが、安全管理はだれもが担えるものではなくて、責任を持って担える人格と、知見から危険を予測できる人、それから勇気をもって制止できる人という、やはり限られた人だと思います。企業に労働安全衛生法上の安全管理者がいるように、安全管理を担える層を対象とした特別講習をきちんとやらないといけない気がします。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そこまで行ったら最終目標のような話でしょう。ボランティアセンターはけっこう待っている時間が多いので、そのときに「これを読んでください」で済ませるのではなく、15 分間ビデオを見せるとか。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

それで講習済みか何かのワッペンをつける。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それから、行く人は行くまでの事前の時間もあります。ビデオなどを見て、こんな危険が待っているということを知っておく。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それは必要ですよ。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

その辺は、十分時間がある研修会資料と現場のボランティアセンターでオリエンテーション的に使う資料では中身がどうしても違ってきますから、類似した部分は当然あるけれども、使いがってを変えておかないといけないという問題はありますよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

やはり指導者向けは十分時間があるとき用で、一般向けはどうしても現場向け、いちばん注意すべき危険のようなことになるでしょう。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

それは現場、現場で違いますからね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それに当たっては、やはり指導者用というよりはリーダー用ですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

指導者というのちょっとランクが上のような気がするけれど、リーダーというとみんなリーダーになるので大丈夫。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

現場のリーダーも含むわけですから、リーダー向けにある程度のものをきちんとそこで押さえておく。それをブレイクダウンしていくことはできるわけですし、逆にリーダーにその目を持ってもらえない限りは幾ら下を育てても意味がないわけです。どんなに下の子たちが成長したとしても、上の人が「大丈夫だ」と言ってしまったら終わりなのです。だから、現場のリーダーともうちょっと上のレベルの人たちをターゲットにして気持ちを変えてもらえるものを、各地のボランティアセンターなり自治体に提供していけるものとして作っていくことが、もともとの私たちの目標だったのです。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

ボランティアに対して地元から情報を出すとき、ボランティアで来るかたは、安全衛生に関する所要の装備を必ずしてくださいという情報の出し方をする。現地に行ってから研修をしても、必要とする装備など、現地で販売や貸与・給与するわけでもないです。現地では、その正しい使い方を教える。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それはホームページもあるので、どんどん情報を出していけばいいのですが、「軍手を持ってきてください」と言っても、ボランティアの人は1組しか持ってこないのです。現地が用意できるならそれはそれでいいですが、持ってきてほしいと言うのならある程度の量を。ボランティアのほうもその辺があまり理解できていない部分があって、そういったことがどうしても出てくるわけです。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

複数現場を体験しているボランティアはまだそうそういないから、現場に対する想像力がわからないのですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それをつけていくことも含めて。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

手袋ならたくさん持っていても荷物としてははしっていますが、ボランティアは持参した品を背負って「やどかり」状態で活動するわけだから身軽にしたい。バスなどに荷物を置ければ別ですが、持参した物資の保管と活動の体制には課題もある。ボランティアセンターに荷物預かり所を設けられ場合を除き、言わんとしているのは商品名ではなく活動に要する機能を明らかにして、軍手よりボランティアならそれに代わるこういう機能を持った手袋のほうがいいですよというレベルの情報を出していけるかですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

最低限の活動物品は、やはりボランティアセンターが速やかに準備するような体制を執っていればいけない。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

救援物資の中からそういうものを早く選び出して使える体制に持っていけばいいのですが、1年もたっ

てから倉庫の中から軍手が山ほど出てくることが被災地ではどこでもあり得る。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今回の岡谷の件では、最初はずっと手袋が足りない、マスクが足りないという岡谷からアナウンスが出されていましたが、ボランティアセンターに予算がないならば、ただ足りないという抽象的なアナウンスのしかたではなく、もっと積極的に提供してもらえるような具体的な働きかけをして企業ボランティア活動を起こすことも必要だと思います。やはり、ボランティアセンター側がある程度のラインで活動してもらえるような準備をするという配慮も必要だと思います。個人個人に期待する形では、どうしても無理があります。

もう一つ、今回、岡谷で面白いと思ったのは、私がお手伝いした現場にいた I V U S A の学生さんが、やたら頻繁に休憩と言っていたことです。休憩をして日射病対策なり水を飲んでくださいというアナウンスを非常に頻繁に出していたのです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それは実は団体で行っているからできることで、わざとそうしてもらったのです。15分で1回休んで全交替して、1回休んでもつらい人はもう1回休んでもいいから、とにかく15分に1回交替させろということをやって、周りから見たら異質だったかもしれませんが、その答えが欲しかったのです。まだ答えは出していないのですが、そういったところも含めてレポートを下さいと言ってあります。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

環境によって対応にバリエーションがあって当たり前だと思います。交替するにも交替要員がいなければ難しいので休憩を取るしかないですね。ただ、実際に作業をやっていくうえで、それだけ頻繁に休みを取ると作業能率が上がらないと思います。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

身体を休ませた状態から作業をする状態に立ち上げるまでには割にエネルギーを要するので、インターバルが15分だと逆に疲れるかもしれませんね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

38度とかという炎天下での話だったので、状況に応じてどのぐらいやるか、まずそこを決めるというところはどうかたのかはまだ聞いていないのですが、10分で汗だくになって、汗も出なくなってしまったような子たちが多いという話だったので、では15分で全交替して静かなところで休んでごらんという話をしたのです。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

そこら辺をどうしても機械的に受け取ってしまう部分もあるのでしょうかね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

15分くらいしか作業ができない環境だったら、危ないからやらないほうがいいかもしれませんね。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

逆に汗を吹き出させてから動くということもありますよね。消防隊員などの場合は、ウォーミングアップで汗をかかせてから作業スタートのようなところがあります。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

汗をかく、かかないというのは湿度と気温の問題で、体の慣れという話ではないので。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

それもありますが、スポーツマンや訓練している人は汗をあまりかきませんが、訓練していない一般のかたは、汗が出なくなったらどんどん体温が上がっていきますから、熱中症の危険がありますよ。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

熱中症予防に関して言えば、塩や梅干しを配るという意見も出たでしょう。だけど、特に水害現場では環境全部が汚くて、自分自身も汚れていて、そこで何か口に入れることはとても難しいですね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

三条市は銀紙に塩をひとつまみずつ入れたものを水とセットにして渡していました。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

ユニセフが途上国の子供の脱水を防ぐために経口保水剤を出していますよね。単に塩だけではなくて、あーいった形のものを小分けパックで作らせればいいのか。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

メーカー提供になると思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

現場の知恵を集める機会が、そのうち必要になってくるでしょう。そうすると、基本的には現場に近い形でみんなを束ねる立場の人たちがしっかりとこの問題について認識を深めなければいけないということで、当面その辺をターゲットにするということでもよろしいでしょうか。そして、長期間の講習に使える資料としてじっくり学んでもらうタイプのものと、現場でみんなを束ねる立場のかたがたが現場で問題を起こさないようにするタイプのもの、2種類の作り方があっていいということですね。それから、状況によっても全部違ってきますね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

少なくとも風水害編と地震編と都会編と農村編、あまり細かくするとオーソライズできないから、共通項を見いだしながらも、風水害と地震ぐらいは・・・。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

最初そういう話になって、だれがどこを分担してという話になってしまったので、今回はすぐに必要になるので、寒冷地にターゲットを絞って作ってみたいうえで全体のファイルを作る。「Nファイル」と呼ぶことになったらしいですが、それができた時点で地震や水害に振り分けていくという手順を踏んでいく。最初にNファイルを作ってしまうことがもともとの趣旨でしたが、それよりももうちょっと特化したものを作ろうということで、内閣府としてはまず寒冷地を11月ぐらいまでに作れということです。

3. 寒冷地におけるボランティア活動時の安全衛生について

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

寒冷地におけるボランティア活動は、ある種特殊な世界です。寒冷地でボランティア活動をちゃんとやるべきかどうかという議論はまだ賛否が分かれています。前提的なものをはっきりさせなくてははいけません。安全衛生マニュアルさえ踏まえればやっていいというように取られても困ります。寒冷地の安全衛生はそもそも論をもうちょっと煮詰めてほしいという部分があるので、そこは気をつける必要があると思います。安全衛生以前の問題があるということです。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

おっしゃることはもっともですが、この検討会の趣旨は、皆様の暗黙知を明確にし、現場の知恵を紙に落

とし込むことです。もちろん寒冷地でのボランティア活動そのものについていろいろな意見があることは承知していますが、実際にボランティア活動は寒冷地で行われており、そこに一定の皆様の経験、知見があることも事実です。そこを、去年の経験も踏まえて、今年の冬に向けて一度まとめることだと思います。だから、寒冷地における活動の手引きのようなものを作る場合は、前書きのような形で寒冷地におけるボランティア活動にはいろいろな意見があって、必ずしもボランティア活動が適切ではないシーンもあるということをつけ加えれば、必ずしもボランティア活動をオーソライズしたということにはならない、皆様の見解も踏まえた一定の抑止力のようなものになるのではないかと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するにこういうことです。水害や地震の場合の安全衛生マニュアルを作ったとします。それは「大いにボランティア活動をやるべきだ。しかし、けがをしないといけない」という組み立てになりますが、雪害などいろいろな危険を伴う寒冷地の場合は、ボランティア活動を奨励する前提で安全衛生マニュアルを作るのとは違って、本格的マニュアルは高いハードルになる危険もあるわけです。そうかといって、低いハードルにするわけにもいきません。だから、ボランティア活動が奨励されている状況下で作るのと、そこにはまだまだいろいろな意見がある状況下で作るのとでは、作ってはいけないという意味ではなくて、作り方が変わってくるということです。一般的な、奨励されているボランティアの場合は、ある程度のリスクを背負っても仕方がないと思います。でも、けがをしないでね、せっかくの善意を無駄にしないでねという作り方になると思いますが、奨励されていない場合はむしろこの条件を満たさなくてはだめだ的なハードルにならざるをえないのではないかと思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ただ、基本的に、水害も雪害も同じように、ここまではボランティアが必要なのでぜひとも来てほしい、これ以上はボランティアという立場の人間は入らないでくださいというレベルは、地域など、多分ものによって違うと思います。寒冷地では、ここから先はプロでなければだめだというウエートがかなり大きくなるだけで、その周辺でのボランティア活動は奨励されるべきだと思いますので、私はそこできちんとしたものを一つ用意しておきましょうということでもいいのかなと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

ボランティアの能力は専門家には及ばないという前提はよくないと思います。寒冷地であっても、単に道の雪かきをしたり、雪害で孤立している住宅の生活をサポートすることはだれでもできます。

寒冷地イコール危ないというのは雪庇の話ですと考えます。寒冷地の中での活動は、活動目的に応じて必要な能力を持っている人を募集するという整理の仕方がいいのではないかと思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それは水害でも同じだし、どこでも必要です。そこを切り分けたうえでのボランティアの話を私はしたいのです。その切り分けも、我々ではなく、その地域、ボランティアセンターにお願いしていきたい。ボランティア側が「ここは・・・」とは決して言えないと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

私はあまり経験がないのかもしれませんが、去年、大雪害がありました。でも、自治体、社会福祉協議会、ボランティアセンターが責任を持ってボランティアを呼びかけたところはほとんどありませんでした。実際に私は、現地に行って無駄足を踏んだグループや、行ったボランティアのためにわざわざ地元が雪かきの仕事を作ったという事例も知っています。基本的にボランティアを奨励する立場なのかどうなのかというところをはっきりさせないと、我々の意図とは違うように使われかねませんから、我々が意図するものをはっきりさせたほうがいいと思います。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

それに、寒冷地は雪害だけではなくね。時期的に言えばナホトカ号の重油流出も新潟県中越地震も寒冷地ですから、雪害に特化するのではなく、雪害の話は寒冷地のオプションだという考え方ということだったのではないのでしょうか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今回の新潟の件などで、災害的な面以外に雪国に住む厳しさをいろいろ知ったわけですが、そうするとボランティア活動というものが通学の支援などにまでずっと広がるわけです。しかし、この部会では防災ボランティア活動上の安全衛生について話してきているわけで、その辺にある程度限定するのかどうか、そこもご意見を下さい。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

地元の人たちは寒冷地の危険性などをすべて分かっているわけですから、アプローチのしかたも変わってきますよね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

降雪を災害ととらえたときに、例えば新潟県中越地震の後の大雪では、小さな自治体では行政需要がものすごく増えてしまいます。そうすると、過疎化、高齢化の進んでいる地域では日常生活の支援をすることが、雪害による支援という形になってまいります。雪害について都会と現地では受け止め方が違ってくると、川口町との話し合いで思いました。都会の考える雪害は突発的な特異な現象とするなら、地元の考える雪害は、長期間の降雪で体力的にも日常の生活が阻害される害を言います。雪害の概念のグレーゾーンがあるように思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

都会の人は、ニュースで大雪被害が大変だと言うと、みんなそこへ行こうとするわけです。でも、その土地にしたら毎年大雪が降っているから気にならない。ところが、全く雪が降らなかったところで降ると、大雪ではなくても大変だということがあるわけです。そうすると、寒冷地におけるボランティア活動時の安全衛生というのは、極端なことを言うと東北・北海道地方などという話でもないという気がするので、概念をもっとはっきりさせたほうがいいと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

寒冷「地」ではないですよ。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

寒冷「地」というより寒冷「気候」のほうがいいかもしれません。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

では、寒冷環境下におけるボランティア活動ですか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

それはいいですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

寒冷地でなくても寒くなりますからね。神戸でも3度、4度以下の世界が待っていたわけだから。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

東京よりずっと寒いと思いました。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

だから、寒冷環境、寒冷環境下、どちらでもいいと思いますが、「地」はやめたほうがいいと思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ代表）
寒冷環境でいいのではないですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
藤田さんが言ったように、雪害だけではないというのは私も思うので、雪害などというイメージに特化せずに、寒冷環境ということでやったほうがいいですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
当初はそういうつもりでした。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）
そのあと多分オプションで広がっていったのでしょう。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
実際、新潟県中越地震のボランティアのとき、雪が降っていたらどうしようという議論はありました。それに、川口町ではテントで寝泊まりして頑張っていた人が低体温症になって救急車で運ばれましたからね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））
町内会館などで荷物を預かるなど、ボランティア活動をしやすくする支援を、現地で地元の人が産業に出来るといいですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
不定期ですからね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
行政の役割でしょう。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）
物を預かるのは大変だと思います。補償の話も出ますからね。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
寒冷環境がいいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
そうすれば地域が特定されるわけではないですからね。逆に、ぼけて困るという議論は大丈夫ですか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
いや、まずなりません。例えば気温が10度以下のときは守ってくださいなどと言えるわけでしょう。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））
都市部でも、過日のように長時間停電になったら「寒冷下におけるボランティア活動」になるかもしれま

せん。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

東南海・南海地震と言われているものも冬に来るかもしれません。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

その中の一項目として、大量の降雪のようなことが出てくるのですか。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

雪は降らないけど死ぬほど寒くなるような場所もあるでしょう。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

北海道の道東はそうです。雪は降らないけれどマイナス 20 度が普通でした。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

寒冷環境が一段落したら、九州や沖縄など暑いところもしたらいいと思うのですが、寒冷地におけるものはいつまでにしますか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

本当は寒冷な気候になる前ですが、時期的にはかなり厳しいですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

今年に間に合わせろということですが、このスケジュールは寒冷地がなかったところに立てたものですので、これはあくまで案です。実際にだれか発表に行けるのかといったことも含めて、スケジュールももう一度見直します。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

でも、9 月に部会を開催すると書いてあるから、原案は 9 月までに作らなければいけませんよね。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

10 月の中越での寒冷地でのボランティア活動のワークショップに、今日の取りまとめを反映させるのですか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

安全安心まちづくりワークショップに何かテーマとして出すかどうか、どうしますか。事務局から、1 月と 10 月について、ここで何かアプローチはできないかというご提案をいただいているのでここに載せているのですが、かなり喫緊になってしまうので、どうしても無理であれば、我々としてはルーチンの作成作業をしていけばいいと思います。ただ、10 月の 7 日、8 日だから、それは 9 月末にはできているという考え方をしなければいけないわけです。そうすると、もう 1 か月しかありません。本当にどこまでやるか、分科会レベルに落とし込めるものなのか、全体会で少し話題提供して意見をいただくぐらいがいいのか、そこは選択しなければいけませんし、スケジュールリングをもうちょっと細かくしないといけないと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

実際 10 月に何ができるかというと、ある程度のもので地元の意見を聞くというレベルでしょうが、意見も聞かないのにこういうものを作ったと言うと反発を買いますよね。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

とりあえず意見交換だったらできるのではないですか。10月に参加することに意義があるのではないですか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センターサポートチーム）

先ほどの成果物のイメージをもう少し膨らませた形で整理したたたき台を持って行って、こういう形で作る準備を進めていますがご意見は、という程度でしょうか。今日は全体会で一応報告して、全体的な合意のもとに分科会が作業部会としてやっていくという形にするのでしょうか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

10月にこれをやって、11月か12月にはもう作ってしまわないと、今年の冬に間に合いませんね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

寒冷環境下におけるでしょうね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

それだと地域も広がりますね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

完成したものを何かに使うつもりなのでしょうか。使いたい人は使ってくださいというような・・・。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

それもあるし、内閣府の次の予算要求の段階で、昨年の予算がどう使われて、どういう成果物があるかということがないと、事務局は来年度の予算要求に苦しいところがあるでしょう。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

これは検討会だから、その辺での成果物の期待はないでしょう。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

いや、成果物がなければ、6回も開いて何をやってたのだと言われるでしょう。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

話し合って具体的にこんなものができましたと言えば、担当者は心強いでしょうからね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ただ、これは何かを決定づけるものでもなければ、これを使いなさいと内閣府が言えるものでもないわけですね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

安全衛生に関するマニュアルなどが整備されていって活動が容易になり、ボランティアの底辺が広がって、質が上がっていく。各地域で活発に活動がなされることによって、結果的に国民減災運動推進の礎になっていくというストーリーは絶対にありますよね。ボランティアだけ増やして、中越のキノコセンターのような事故を再発させないためには、安全な活動について皆が学び、互いに気づきあうことですよね。そして、ボ

ランティアセンター機能をもう少し充実させていくこと。元役人としてはそう考えたいのですが（笑）。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

先ほどの議論に戻るわけではありませんが、ある程度の全体背景を知っている者として私が言いたかったのは、我々は寒冷環境におけるボランティア活動の安全衛生という視点を貫けばいいのですが、ほかとのかねあいしていくと、大雪が降ったところでのボランティア活動をどうすべきかという文脈の中にこの流れも入っていると理解しておいたほうがいいということです。この是非を巡る議論、要するに呼びかけるべきか、べきではないかの議論を今度の冬に向けて特に長岡市辺りを中心にやっていて、危ないではないかの議論でストップしている人たちが確実にいて、その危ないところをクリアしないと呼びかけるべきではないという議論で今やりあっているという流れがあることは知っておいたうえでやる必要があって、我々はそれに対して中立という立場でいいのではないのでしょうか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それがいいですね。ただ、全部がボランティア活動を一切やめましょうと決議したとしても、寒冷地の作業はあるわけですね。雪下ろしはさておいても、寒冷環境の中で作業するボランティアがゼロになることはありえないと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

現実として雪害をどう見るかということはあると思いますが、ボランティアが入らないと成り立たない要素が非常に増えているような気がします。雪下ろしについては、小千谷や長岡など、地下水の豊富なところは、工事助成金もついていて、屋根の配管がかなりでき上がっていると聞いています。しかし、川口町のよう地下水のないところが地下水を溶雪に使うと、生活用水そのものが成り立ちませんから、やはり限られているようです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

「こういったものを考えて作っていますけどいかがでしょうか」と言うのも一つの提案であって、「そんなものは必要ない」と言われれば、それはそれで使わなくてもいいでしょう。ただ、いろいろなかたにこういうことを知ってほしいという学びの分野ではあってもいいと思います。別に防災ボランティアでなくても、日々の自分たちの生活の中でのボランティアでも、寒い冬、路上生活者に対してどうするかということに使ってもらってもいいわけです。そういう意味では、寒冷環境のボランティア活動をこの部会としては作っていいということで、あくまで雪害のためではないということをきちっとうたったうえで、そこをオーソライズしていただく。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

全体をトータルに踏まえたうえで、あくまで安全衛生の立場だとしたほうがいいような感じですね。アウトプットは別にあまり雪害に焦点を当てなくてもいいという前提でいいわけですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

そのほうがいいと思います。そういった意味でも、10月には簡単な発表でもいいからやっておいたほうがいいということになるでしょうね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ちなみに1月は21日です。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

幾ら自立型だからといっても、テントの中で凍死されては困りますからね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そこまで含めて考えなければいけません。地震のときもそうでしたが、どこでボランティアのテント生活をやめさせるかということでもけっこうもめたのです。だから、ある程度の指針ではありませんが、ここから先はやめましょうというものも出してあげたほうが動きやすいというかたたちのための資料でもあるわけですから、ある程度のものを作ったらそれを流布する必要があるので、それをどういうブックレットにするかという話もいずれしていかなければいけないと思います。それこそが成果物で、パワーポイントの資料とかブックレットとか、いろいろ言葉は出てきているのですが、それもある程度決めていかなければならないと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

アウトプットに耐えられるようなものを、それを印刷物にするしなは別にして、作るという話と、いろいろ検討するという話は別物ですよね。そうすると絶対に費用の問題が出てきますが、ブックレットの費用はだれが持つのですか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

助成金頼みしかないでしょう。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それについて、資料3ページの3. 作業内容「○必要に応じて助成金などの申請も検討する」ということまで含めて活動しないと、実際にブックレットは作れません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

その部分の費用という問題については、著作権も含めて出てくるだろうけれど、やはりある程度の展望を持たないといけません。具体的作業の成果として社会一般に通用するようなものを作れば、それもただなのかという議論は絶対に出てきます。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

それは制作者側個々人の懸念という意味ですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そういう意味ではなくて、自発的・自主的に作って、自分たちでやろうというものならば、一つの自主研究会の成果物でしょう。でも、検討会の部会で作った成果物がどこに帰属するかという理屈で考えると、それがかりに内閣府のクレジットとして通用するならば、さすがに無償はないという感じですよ。その辺の議論はしておいたほうがいいと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

その部分については今まで意見が出なかったですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

内閣府は、内閣府のものではないけれども、個人に帰属するのも困るとおっしゃっています。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

最終的に成果物の責任は個人ではなくこの部会となると、これは検討会の部会でしょう。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それは検討会の分科会ではなく、安全衛生部会というものになっていくという考え方をされていました。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

ただ、一応検討会の分科会でやっているの、分科会としての成果もある程度含めなければいけないと言われていたと思います。今は検討会の中の分科会ですが、その中でもある程度の成果物が無いと、この検討会の分科会は何をやっていたという話になりかねません。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

そうすると、うちの部会がいちばんややこしくなります。フォーラムから発生した部会絡みでもあるわけでしょう。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

もともとそうです。安全管理のフォーラムがあって、そこから発生しているので、この安全衛生部会については検討会メンバー以外のかたも参加できます。それは内閣府にもオーソライズされていて、検討会イコールでは決していないわけです。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

言ってみれば、検討会から拡大しているわけです。その拡大の成果として検討会が利用するという点でも問題ないという気はします。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

今から作るものは安全衛生部会の所有物になりますが、それを検討会でも使っていいですよというスタンスで、検討会はそれをもっと広く社会に流布していくという形です。別に内閣府がどこかに売るつもりはありませんから、それはいいのではないかと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

あとは使用許諾をどこに出すかですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

波及効果がある程度考えられるので、主体する側があいまいだと、コピーする側はそのあいまいさを利用できますし、逆に、利用する側の立場に立つと責任の所在が見えるようで見えない。これは検討会なのだから、要望も含めてこうしてほしい、こうしたいというものは出したほうがいいと思います。部会というものは、解釈論でいくと、内閣府の検討会とつながってはいるけれども独自のものでしょう。いわば自主研究会ですよね。そこにクレジットが来るのか、分科会の成果物だという話になってくると、広い意味で内閣府が責任を持ったとは言わないまでも一応関与したという・・・。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

いろいろな意味で、監修は内閣府になるでしょうね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

その辺は決めておいたほうがいいと思います。極端なことを言うと、これは洙田さん個人の著作物で、それに我々が意見を挟んだことにすべきだということであれば、それもありだと思います。あいまいですよ。今回、私たちが出すものは一つの指針を示すような話だけに、りっぱなものを作ればそれでオーソライズされる可能性を秘めているので、その辺は要望としてどうしたいか、ないしはするかということと言わないとだめだと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

もう一つは、どれぐらいの細かさで検討会成果として出すかということです。本当に現場での実用に耐えるものとして研究会なりの成果として市販も視野に入れた形で作るか、二またもありえると思うので。中身については基本的には同じですが、細やかさのような部分について・・・。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

知的所有権ではありませんが、洙田さんなり岡野谷さんなりがそれなりに積み重ねてきたものを出すとすれば、それまでなかったいろいろな蓄積をただでということはないという意味で助成金をもらうとなると、だれがもらうのかという受け皿の議論になるでしょう。部会は受け皿にならないから、例えばどこかの団体が受けるのか、岡野谷さんが受けるのか、研究会の形で受けるのかという議論になってきます。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

ただ、資料には「安全衛生対策の実施状況の調査も検討する」、「内外の資料を幅広く収集する」等々、これを作り上げるための要件が幾つか記されていて、それには人手と時間と経費を要します。でも、これを全部ダイナックスさんお願いできるのか。

藤田（政策統括官付参事官付補佐）

このペーパーは今までの安全衛生部会の議論をまとめた紙です。クレジットとしては内閣府のものでも、ダイナックスさんのものでもありません。この紙の上にテキストを置くという作業は事務局のほうでやっていますが、この紙自体は安全衛生部会のメンバーの議論が作っているという認識です。だから、その議論の中で助成金の申請が検討されるなど、調査を行うことが今までであったということです。だから、内閣府として、そういう助成金や調査をお願いしますというものではありません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それは十分理解しています。ただ、発展型を考えるとかなり議論になってきます。逆に言うと、部会としてはどこまでやるかという線引きのような議論かもしれません。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

逆に、内閣府からお金が出ないから、部会でお金を取ろうという話にもなっているわけです。予算があって全部出すということならば、分科会で全部済む話だと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今の問題は急浮上した話題ですが、今日の話題のもう一つ極めて具体的なものとして、寒冷環境における活動の諸問題を具体的にリストアップするという作業も予定されているわけです。今の問題は非常にデリケートで、きちんと決めておかなければいけませんが、すぐに答えが出るものでもないし、今日答えを出さなければいけないものでもないと思うのですが、どうでしょうか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

こういったものが今の部会で挙がりましたということは全体部会でも・・・。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、具体的に10月に安全安心まちづくりワークショップに出ると仮定した場合に、何と名乗るかという問題はあります。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

逆に、この委員会がスポンサーをつけて、この部会の活動に要する経費を得ながら進めていくことに対しての考え方の制限もあるわけでしょう。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）
そうですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
安全安心まちづくりワークショップは、向こうが招待してくれて、向こうの費用で行く分には何の問題も起きません。それで、そこに行ったとき、これは部会で検討した中身だと言うのか、そこは難しいところですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
「部会で検討した」は成り立ちます。ただ、先ほどから澤野さんが言っている最終的な形はどこに帰属するかという仮定においては、この部会で勉強している結果だということの問題ないのではないのでしょうか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
中越の安全安心まちづくりワークショップの中では、すでに「寒冷地でのボランティア活動」という分科会が決まっているという書き方ですね。さらに、次の防災ボランティアのつどいでボランティア活動の安全衛生をテーマにした分科会設置を検討と書いてあります。ということは、10月はずでにこの分科会があるということでしょうか。

藤田（政策統括官付参事官付主査）
中越のフォーラムに関しては、主催者ではないので承知していません。後援はあるかもしれませんが、災害予防担当としてお金を出しているということはありません。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））
10月の主催はどこですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
安全安心まちづくりワークショップの実行委員会でしょう。もちろん地元も加わった実行委員会ではありますが。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
実行委員会の中心はどこですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
去年は神戸、その前は東京で3回ぐらいやって、今年は5回目か6回目になるのではないですか。防災まちづくりワークショップの発展型で、まちおこし、まちづくりの防災版でしょう。ワークショップが中心だから、ここで結論を出すというたぐいのものではありません。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
少しずつ大学の中でやっていましたが、神戸が10周年で神戸でやって。分科会を作るのは簡単なことで、多分それはやると思うし、寒冷地でのボランティア活動はテーマになっていると思います。ただ、そこに私たちが入るかどうかはまた別で、例えば安全衛生部会はこういうことをやっていますよと言うのなら、むしろ全体会での話題提供のほうがいいのかなという気がします。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
「こういったものを作ったけれど偏りがいないでしょうか」と、我々のスタンスとしては意見をいただくと。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

ただ、どこまで具体的な成果物になるか、かなり日程的に厳しいですね。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

ただ、寒冷環境下における労働安全衛生については、きっとたくさん研究書があるような気がします。そういうものを集めて、一般のボランティアが使うならばその中から何をもらえて、何を足すかという整理があるかなと。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

そういうものであれば、ただ集めているだけだから著作権は発生しないですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

青木さんがまとめたものを洙田さんがさらにまとめてくれたものが、この「防災ボランティア活動の情報・ヒント集」ですか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

専門的な作業を今やっているところで、大体3割ぐらい進んでいます。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

先ほども申し上げましたが、防災ボランティア検討会は、今までの皆様のボランティア活動で得られた知見、知恵を紙の上に落としていって、後に続くかたがたのために広く活用いただくことを考えています。だから、単にいろいろなものから集めてくるのではなく、皆様自身の体験から得られた知見、知恵の中で、寒冷地での活動は比較的少ないかもしれませんが、こういうことは寒冷地での活動では留意すべき点ではないだろうかと挙げていただいて、それを例えば寒冷地に住んでいるかたがたや専門的な文献などについては専門家のかたがたに裏打ちしていただくという作業が、本検討会の趣旨に沿っていると思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

その前提は当然ですが、そのために内外の資料を集めて、その情報をまとめていくことは非常に大切なステップです。別にそれだけの中から何かを作りたいとはだれも言っていませんし、それには足りないものがあるということでこの部会が設定されている、今までのものではボランティアは何にも守られていないというところからスタートしていますから、それはもちろんおっしゃるとおりです。ただ、ある程度今までのあるものを集めて整理するということは、大切な作業だと思います。

藤田（政府統括官付参事官付主査）

確かにいろいろな研究もあるし、労働安全衛生管理の分野にはいろいろな知見がありますが、例えば医療や医学的知見、労働安全衛生上の知見などは厚生労働省の部分になってくるので、それをボランティアに活用できる形にせよ、書いた途端に内閣府の所掌行政の範囲を外れてしまって、内閣府として関与できる範囲を逸脱するおそれがありますので、この検討会は内閣府でできることという範囲にどうしても限定されてしまう部分があります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

内閣府の防災担当ができる範囲ということですね。

藤田（政府統括官付参事官付主査）

はい。もちろんそれはこの分科会として何かを発信する場合の枠です。それを部会として発信するという

ことであれば、その枠はある程度取っ払われると考えています。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
今は分科会と部会を使い分けているわけですね。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

はい。検討会の分科会として情報ヒント集のような形で成果を出すということならば、そこはどうしても内閣府として担保できる範囲にとどまらざるをえません。一方、部会として、自主勉強会としての成果の発信ならば、内閣府という縛りはありません。ただ、それに対する説明責任のようなものは発生してくると思います。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

権益を侵すという視点ではなくて、ボランティアの安全性を考えたときに、例えば人間の体はどのぐらいの温度の中ではどのぐらい耐えられる、それにこういう湿気が入るとその条件はもうちょっと厳しくなるということは、共通項にはなりにくいと思います。人間の体が活動に耐えられる条件は何々の文献によるとか、労働安全衛生法ではこう決めているがボランティアとして活動するときにはどうだろうかと引っ張ってくるやり方は、省庁ごとの戦いになりますか。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

地の文に書き込んでしまうと、内閣府としての所掌なのかどうなのかということが問われてきます。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

それを批判して、あれでは役に立たないと言うと厚生労働省が怒るかもしれませんが、人間の生存要件、活動要件、配慮すべきことなどはだれもが知っていることとして各省庁が出しているわけだから、ボランティア活動をするとき、その中で配慮すべきものはやはり参考にして大切にしましょうねと言うのはいいわけでしょう。

藤田（政府統括官付参事官付主査）

おっしゃるとおりです。原文をそのまま丸ごとの形で引用しないということであれば許される範囲だと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

いずれにしても、「ボランティア活動時の」という前提さえクリアすればいいのです。ただし、それを一般化してしまうと問題になります。「防災ボランティア活動時の」と限定しているが、よく見ると一般にも通用しそうだということはまた別の議論です。しかもそれは拘束力を持つ話ではありません。経験知を少し一般化しようというレベルの話です。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ここまでしか内閣府は担保しませんということを言われて作るのは、こちらとしては非常に作りづらい部分があります。安全衛生部会としては医学的な見地でも労働衛生の見地でもいいから、とにかくいろいろなものを収集して、そういったところから防災ボランティアの安全・安心が語れるものを作って、それが使える、使えないという選択は内閣府にしてもらうほうが多分楽だと思います。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

要するに一部の省庁の定めた法令なり、規則なり、準則なりを、批判したりかってに解釈を作ったりしなければ、それはだれもが使える法律だから問題ないわけですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それは全然ないですね。逆に、全体を包括できるのがこういう部会だと思います。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

部会としていろいろなものを収集していただいて、防災ボランティアのために体系化していただくことは非常に素晴らしいことだと考えています。ぜひお願いします。一方、それを分科会としてどう扱うのかというところは、今、申し上げたような制限がどうしても一部かかります。そこはご了承いただきたいと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今の話は、そこで「分かりました」ということでよろしいのではないですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

今の議論で言うと、我々としてそれなりの意欲を持って、りっぱなアウトプットをみんなの労力で作るならば、内閣府とは別の部会なり研究会にクレジットを持たせるべきだと思います。そうでないとあいまいになりますので、だれだれが代表で、こういうメンバーで検討したという研究部会のクレジットにしたほうがはっきりします。そして、その研究部会のクレジットを分科会なり内閣府がどう使うかは次の問題だという議論を組み立てておいたほうがいいと思います。要するに、その成果をどう使うかの議論は分科会と内閣府で、アウトプットでやる作業主体は部会であり、それはあくまで自主的なものだ決めておいたほうがいいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そうです。その成果を分科会で発表した結果、それを内閣府が取り入れるかどうかは次の話で、部会には自主性があるとしておかないと、絶対に議論が混乱します。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

これで部会と分科会という言葉の使い分けが整理されたように思いますが、冊子まではともかく、その年の研究活動等々で助成金を申請する必要性も出てくるのではないかと。ただ、その辺は研究部会名として申請して、研究部会で作られた成果の利用方法は検討会全体の討論にゆだねていくという形の整理でよろしいのではないかと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

検討会から生まれたかもしれないけれども、あくまで独立した自主的な部会なのだというに。そうすればはっきりするでしょう。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

では、残り、具体的な寒冷環境下でのボランティア活動の諸問題について項目を挙げて、見学に移りたいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

具体的事例というのなら、新潟県中越地震のとき、外部のボランティアは雪が降った被災地に残るべきなのか、引き揚げるべきなのかという議論がありました。地元は外部のボランティアに帰ってくれと言ったのだけれども、「いや、いる」と頑張ったボランティアもいました。これはある意味、長期滞在に向くか向かないかという議論とほぼ同じ話ですよね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

降雪期を迎えてのボランティア活動の可否ということですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そうではなくて、地元からすれば準備不足だから帰ってくれと。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

例えば、ノーマルタイヤの車で来て帰れなくなってしまうなどといった問題も含めてですよね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それから、そんな服装で来ていない。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そうではなくて、外部ボランティアが雪の環境下で長期滞在するということは、事実上、本人がいいと言っても泊まる場所や食事を確保せざるをえないわけです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

地域としては経済的負担も含めて、負担が増えることは明確です。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

ありがたいが迷惑だという精神的な負担もあるでしょうね。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

宿泊場所を用意しなければいけないというのはどうかなと思います。宿にお金を払って泊まってくださいという話ではないですか。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

そうさばければいいのですが、おいでいただいているから地元で準備しなければいけないのではないかと考えると、帰ってもらおうという話になるのかもしれませんが。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

地元の活性化のために、宿に泊まっている分には特に問題はないと思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

あと、ボランティアがそれで嫌なら帰ればいいと思えばいいですが、やはり来て手伝ってくださっているのだからということが地域にも出てきてしまうわけです。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

それはお客様として見ているからです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

お客様ではないけれどもやってくださっている、自分たちが与えていただいていると思ってしまうから、反対にこういったものをちゃんと用意しましょうとなってしまうわけです。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

解釈論は抜きにして、いずれにしてもこの論議があったことは事実です。それで、大半は雪が解けたら、また来ましようという議論で引き揚げました。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

あと、低温がもたらす持病への悪影響もありますよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

どのレベルになったらボランティア活動をやってはいけないというものは、降雪時や荒天時は活動を中止するというものとはほぼ同じ議論です。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

活動がしづらい、できないなど、物理的な面もありますが、もう一つ重要なのは健康による変化です。それも明確にしていかなければいけません。それは厚労省の範囲になってしまうかもしれませんが、身体への影響を無視することはできません。寒いからやめよう、動きづらいからやめようということは言いますが、健康被害についてはあまり語られていないのではないのでしょうか。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

あと、ボランティアの条件もありますよね。今、地震だというと、高齢者からやっと歩ける人まで行くでしょう。やっと歩ける人に「もっと肉体労働をしたい。やかんの番なんか嫌だ」と言われても困ってしまいます。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

この前の検討会で議論になりましたが、招く側は若者を想定しているのだけれども、実際は高齢者がたくさん来るのです。だからといって高齢者は来てはいけないとは言えないし、高齢者の中でも役に立つ人と立たない人がいるわけですから、一律に年齢で規制するわけにもいかない。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

シニアボランティアというのも、どこまでをシニアと言うかですからね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

年齢でやったら年齢差別になりますね。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

日経新聞か何かのアンケートでは、みんな自分の年齢から三つから五つぐらい上を高齢者と見るらしいのです。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

要するに、自分を高齢者とは見ないということです。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

問題は、その地域の人がやる話と外部の人がやる話はかなり違うということです。寒冷地の作業で実際に死亡しているのは、地域の人です。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

それと、観客がいると頑張ってしまうというところもあります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに、その環境から逃れられない人のほうがやられるのです。外部の人はそこから逃げられるから。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

寒冷下は、けっこう温度変化が激しいところです。普通の天候の冬山を歩くとき、どのくらいの装備かというと、肌着を着て、シャツを着て、それでヤッケです。そうでないと動き出すと汗だらだらになるわけです。アノラックなどを着ていたらたまりません。でも、休憩するとあっという間に冷める。それと同じことが寒冷下で活動していれば起こるわけです。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

これも慣れがあります。私が北海道にいたときに、北見の郊外はマイナス 20 度ぐらいでしたが、1 週間もすると感覚的に順応していくのですよね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

2～3 日で順応してしまいますよ。スキーに行き帰ってくると東京は暖かいと思います。ただ、そういう順応度にも個人差はあります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

やはり雪がいっぱい降っていたら活動してはいけないわけでしょう。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

いけません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

結局、大雪のところにボランティアが行っても活動できないということですよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それでも、雪がいっぱい降っていたら活動してはいけないでしょう。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

でも、そこが大雪に備えているような場所であれば、大雪の中でも歩けるわけです。ある程度対策がされている場所とされていない場所では環境も違います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

どうしても雪に意識が偏ってしまいますね。雪以外は想定しにくいのでしょうか。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

実際に暮らすと、雪よりも路面凍結のほうがすごく活動しにくいです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

寒冷環境とは何かということを、もうちょっと出していくといいかもしれません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

具体化するには、寒冷環境下では何が危ないかという、その逆の議論が必要です。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

神奈川で出すか出さないかというとき、いちばん心配したのは現地まで安全に行けるかどうかでした。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

それもありますし、低体温症になったら判断力が低下して危険です。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

やってみたら、なかなかイメージしにくいということが見えてきました。

それでは、30 分間、見学・休憩の時間を取りたいと思います。

4. 見学－4 階

5. H18 を含む、近年のボランティア活動における安全衛生、経験、課題

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

では、再開します。後半の最後にあった、寒冷環境でのボランティア活動の諸問題については、具体的な項目がなかなか挙がってきませんでしたが、これは私たちの勉強不足かなと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

どういふものが危ないかというと、先ほどの議論の逆立ちでいくと、低体温症と心臓まひ・・・。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

循環器もあります。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

呼吸器もあります。細かく言えばたくさん出てくると思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、ここはあくまでも安全衛生です。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

普通にいくと、スリップなども出てきます。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

バイクは雪道は行かないのでしょう。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

新潟県中越地震のときも、帰宅困難になってしまうので、いつ閉めようかという話をしていました。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

具体的な健康被害のほうに警告という意味ではいいですね。低体温症も確実ですね。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

ほうっておいたら死んでしまいますからね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

凍傷などもありますか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

もちろんです。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

低体温症にしないで、低体温にしておけばいいのではないですか。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

「など」にしますか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

はい。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

あとは心臓疾患系ですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

だんだん細かくなっていますが、項目としては健康被害でもいいのではないですか。それには身体的負担も入ってくるから。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

それから、低体温環境によって判断力だけではなくて行動力自身が低下しますよね。自然環境の違いから生じてくる危険性と、低温でもって生理的にさまざまな機能が変化してくる問題とがあると思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

多分そこが抜けているのだと思います。寒いところでは低体温症になったりする危険があるということは、ある程度皆さん理解できていると思います。しかし、人間の判断力や行動力が変化するという部分がちょっと抜けています。そういったところを中心にこの問題を考えて書く、今回はあまり大きなものを想定しないほうがいいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに単純なことすら知らないという議論のほうがいいと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

登山用品屋さんへ行けば、こういうものを補うものを買えると思っているのです。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

今、物は本当によくなっていますからね。昔は、高くても、虫が食ってもウールのをそろえたけれど、今はウールよりも化学繊維のほうが高機能ですよ。そういう科学的な対策でかなりの部分はカバーできるのですが、そういう時代の進歩と自分の体験とのギャップも、シニアボランティアには生まれるのでしょうか。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

でも、それはボランティアには要求できません。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

コラム的な部分で、こういうものがあるよという紹介はあってもいいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

議論が元に戻ってしまうかもしれませんが、寒冷地環境で災害が発生した場合、外からボランティアが行くと仮定したとき、ボランティアが行っていい環境、行くべきでない環境は設定できますか。それはやはり気象条件になるのですか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

単なる気象条件だけではないでしょう。先ほどから言っているように、生活のレベルでも危険が生じるような問題があるから、何も知らないボランティアは危ないという論に発展してくるわけでしょう。生活のレベルというと、やはり大量降雪に伴う諸問題ですよ。それだけではなくても、いちばん危険なのはその辺だから、すぐボランティアが行っていいのか、いけないのかという論になってしまうのではないかという気がします。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

大量降雪だとボランティアが必要だという議論があるけれども、大量降雪の場所には行けない、ないしは危ないというところがありますね。

藤田（千葉レスキューバイクサポート）

それは受け入れ側の問題になると思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

しかし、安全衛生部会としては、ここから先は運動してはいけませんと言っているわけですよ。それを聞か聞かないかは受け入れ側の問題でもあるし、ボランティアセンターの問題でもあります。でも、その線を出しておくことによって抑止力にもなるということです。今、その線がないのであれば、ボランティアに関してはここまでの線で行きましょうというものを示してあげる。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

災害ボランティアを目指す人は日ごろの健康管理、体力管理から。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

それは基本です。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

でも、風邪を引いても帰らないのですよね。風邪を引いたら帰れと書いておきたい。「頑張ります」と言わ

れると、「あなたのせいでここに風邪がまんえんする必要はないから、帰って、元気になってから来てください」とは現地のコーディネーターは言いづらい。でも、そこにルールを置いてあげれば言えるようになるわけで、それが欲しいのです。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
自分だけの問題だと思っているのですよね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
雪は危険性が見えやすいですが、そうでない部分についてはどうでしょうか。メーリングリストの運用が、今日このあとオーソライズされれば始まりますので、時間もあと 30 分で、もう一つテーマがあるので、この辺を意識しながら、気づいた部分は来月の部会までにメーリングリストで個別に投げてくださいということで、一人一人の宿題とさせていただきます。

もう一つのテーマは、今年度、昨年度行われたボランティア活動の中から安全衛生にかかわる問題について出し合って、マニュアルづくりに向けての具体的な意見を出し合いたいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
直近は長野です。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
あれは炎暑時の活動でした。環境的には泥水による汚染がもう一つ出てきます。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）
諏訪のほうは下水が上がっていましたが、岡谷は上から普通の土砂が落ちてきたので、汚染された泥水というイメージはありませんでした。ただ、土砂の中にガラスの破片が入っている状況でした。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
諏訪は内水氾濫で、岡谷は完全に山崩れ、土石流です。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）
周囲何キロしかない諏訪湖でも、内容は全然違うし、やっている作業も違いますから。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
そういうものを出していくことが大切だと思います。汚泥というイメージが全然ついていないかたたちがたくさんいたのも事実で、泥は汚くないと思って行ってみたら、くさくて驚いたという子がたくさんいました。その子たちが汚泥の管理をしたときに、その手でまた作業をするわけです。そうすると、そこでどんどん広がって行って、目が傷んでしまったということも起こっています。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
衛生環境もあるけれども、感染症が広がったということは、今回はなかったと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
幸いなことに、今までもありません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

今回いろいろな報告を聞いて、安全衛生にかかわるポイントとして、ボランティアの人たちの休憩場所ないしは待機場所の問題が一つあったと思います。ボランティアが大量に来ると、受け付けをしたあと待っていないといけないのですが、わざわざその人たちのために体育館を提供したり、テントを張ったりということがないので、その待っている場所が炎天下のところもあったのです。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

諏訪は体育館の中でした。岡谷はよく運動会で使うような白いテントを張っていました。ただ、張っていたのが市役所前のタイル張りの上だったので、照り返しが強かったです。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに暑かったのです。そして、そこに入り切れなかった。より詳しく言うと、市役所のテントのところはいいのですが、そこから車で現場に行って、活動するまで待っているわけですが、そこにはありませんでした。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

個別の現場になってしまうと、今までも休憩時間という配慮はどこにもありませんでしたよね。災害の規模にもよりますが、配慮としては現場でも休憩場所の確保は必要ですよ。

澤田（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

休憩時間と同時に休憩場所の問題。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

本当に簡易テントぐらいはないと。それは書いておくべきだと思います。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

今、どこの村でも町内会単位で、盆踊りやお祭りなどでテントは張っているから、だれかが声を出せばテントは設けられそうな気がしますよね。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

今回は公民館が泥で埋まってしまいましたからね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

終わった後は温泉券が配られたからよかったのですが。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

岡谷は出来ていたと思います。湊地区の出先にもテントとブルーシートを張って、看護師が待機していました。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

ただ、今の話は後半のほうではないですか。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

私が入ったときですから、1週間たっていないですよ。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

後半でもそういう配慮があったことはすごく評価されるべきだし、その経験から、今度は頭からやりましょうとしていけばいいわけです。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ）

長野の場合は公務員を現地に大量動員していたでしょう。体育館の中にブルーシートを敷いた休憩場所なども準備されていましたし、現地にテントを張るなど、活動する人が自分たちの仲間のことだから割に配慮が行き届いたところがあるのではないのでしょうか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

ボランティアのためにではなかったと言ってしまうと、公務員がかわいそうです。それは公務員だからではなくて、団体でまとまって行った利点ではないのでしょうか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それを含めて派遣したということですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

むしろ、公務員のような人が現地を見て、いろいろ注文をつけた結果、地元の自治体がそれを整えていったと言うほうが正しいのではないのでしょうか。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

あれが全く外から来たボランティアだけだったら、その意見の吸い上げはないから、全然違っていたと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

逆に言うと、現地は気づかないから、行ったボランティアの人がそういう要望を出して、そういうものを整えていくことも重要です。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

現地でのボランティア活動が終わった後の聞き取り調査は、被害状況をどう改善したかということに眼目が行きすぎていて、ボランティア活動の安全を確保しながらどう活動が展開されたかという聞き取りをしているかどうかということになりますね。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

それはやっていないですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

岡谷の湊地区は危ないから入ってはいけないということで、ボランティア活動がずっとできませんでした。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

湊地区は、ボランティアセンターのボランティアは入ってはいけないことになっていたのですが、2時間半だけなどの一時帰宅の時に、地元の地区のボランティアチームは入っていました。同じ地域でも被災していない人たちがいるので、その人たちは市役所職員の付き添いのもとで入れました。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

一般的なボランティアではなく、地元住民の地域協力の話ですね。今回、鹿児島もそうですが、どこまで

をボランティアと言うか、公務員の派遣も含めて線引きが難しいところがありました。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

また、今回、湊地区などは土石流センサーが設置されてからでなくては、ボランティアを入れられないという意見も出ていました。万が一の危険が発生した場合、それを伝達する簡単な仕組みとしては、現場ではやはり大きな声を出すしかないわけです。だから、ボランティアセンターにホイッスルを大量に持って行って、IVUSAの学生さんなどに配りました。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

そもそも土石流センサーのサイレンの音を聞いたことがあるのか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

だから、警戒の出し方という訓練も必要だと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

先ほどの地元には広報されていて、外の人には分からないというのは、まさに土石流センサーの話です。地元の人たちは事前にこういう音がしたら危ないと言われているのだけれども、ボランティアにとっては今の音は何の音という世界だと。地元の危険情報を外から入ったボランティアにどう正しく伝えるかということは現実にありますよね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

河川の水位でも、ダムが放水するときにはサイレンを鳴らすけれども、釣り人はそんなものを一向に気にしないというところがあります。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

でも、そういう人がいるからあっても無駄だという議論がよくありますが、その人たちをどかすためのものではないということで作っていかないと、切りがないと思います。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

チェックリストはどうになりましたか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

やたら時間がかかって不評だったという報告を聞きました。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

結果そのものは後でご報告します。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

あと、前半で出た水プラス塩分の上手な取り方も、個別の工夫が必要ですよね。水はたくさん来るのだけれど、ポカリスエットは高いから来ないのですね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

実際にはポカリスエットは熱射病レベルになったら薄めないと飲用にはならない。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
それはそうです。治療薬ではありませんから。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
労働安全衛生でいくと、水害で危険なのは熱中症と感染症と二次災害でしょうか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
洙田さん、予防接種は大なり小なりリスクが伴うわけですが、地震や水害などでは素手でいろいろなものを触る可能性がとても高いので、破傷風の予防接種を積極的に呼びかけたほうがいいのかどうか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
アメリカのカトリナの資料には、接種しろとか免疫力をつけろなどと、はっきり書いてあります。免疫はあったほうがいいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
あと、農家などには農薬や農機具を動かすガソリン系のものなど、そもそも危険物がありますよね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
農薬が泥だらけになってしまって、開けてみたら反応して中毒症状を起こしてしまったという話も聞いたことがあります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
危険物質は注意なくってはいけません。地元の人は分かるけれど、外の人には分かりませんから。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
しかもそれがぶちまけられていたり、土砂に埋もれてしまったりしていることが怖いですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
そうすると、土中に隠れている危険物というものもありますね。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））
いずれにしろ、土壌が肌に触れないようにする工夫ですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
ただ、炎天下での作業だと重装備というわけにいかないんで、そのかねあいが難しいですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
今回は仕事量とボランティアとの関係で、そんなに無理して作業しなかったという印象を持っています。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
作業量がそんなにありませんでした。

藤田（千葉レスキューサポートバイク）

あとはバケツリレーです。けっこう人が集まっていたので、午前中と午後で人を入れ替えたりしていました。余ってもいたので。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

土日以外の、平日の少ないところを県庁の動員が埋めていたから、その点ではコンスタントに人が行っていますよね。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

あれだけ被災地に支援に公務員を動員できたのは希有ですよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

地区単位や学区単位などで割り当ててみんな来ているわけだから、そういう意味では近隣の協力が生きていますよね。先ほど、外部の人を拒否するのはいけないというような議論がありましたが、長野は別にしても、規模が小さければ県内の人間でやるというのもいいと思います。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

新潟県中越地震以降は雪と水害以外の大きな災害は起きていませんから、水害の中からの諸問題かと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

水害に限定すると、安全衛生の人間がボランティアセンターにいたかは疑問です。行政側には保健所の保健婦さんなどがいますが。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

行政側でボランティアの健康被害防止のような機能が持てればいいのでしょうか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）

行政自身あまり労働衛生がよくないですから。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ボランティア安全衛生士のようなものを作りたいですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

私もそう思いました。これで食える、食えないはともかく、衛生士ではなくても、ボランティアセンターにはボランティア安全衛生コーディネーターのような立場の専従スタッフを置いて、地域特性に精通する地元の安全衛生担当者とコンビで当たるようなシステムにしていくという論議の方向性は必要でしょうね。

秦（J F F W（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

公の資格になれば、その人が大きい声を出すことをみんなが認知するという効果はあります。私はいつも言っていますが、安全管理は別資格だと思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

何かやらなければいけないということはみんな分かっています。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それに、ブレーキ役の人間は別資格でなければ無理でしょう。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

プロの職場にはそういう人たちが必ずいるわけです。もうボランティアだけ自己管理という時代ではありません。シニアボランティアが増えてきているし、地元のボランティアのかたたちについてもコーディネートは必要です。

6. 振り返り

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

何を議論したかよりも、全体に何を訴えるかという問題です。

秦（JFFW（ジャパン・ファイヤ・ファイティング・ウィミンズ・クラブ））

ボランティアの年齢層、体力層が広がっているだけに、安全管理、衛生管理の重要性がすごく増していると思います。新潟県中越地震でも後半は高齢者が多かったでしょう。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

社会に恩返ししたい年齢層が多かったですね。あと、学生もいましたよね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

学生は学校が始まってしまったらもう土日になしか来られないところがありますが、シニアのかたたちはコンスタントにある程度やってくれる部分もあるわけです。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

各分科会発表の時間は、全体での討議もあるから、せいぜい10分でしょね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

今年の第1回で安全衛生部会そのものはオーソライズされていますから、その経緯について話す必要はないと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

では、第1の報告点は、分科会と部会の関係の確認ですね。安全衛生の分科会があって、自主的にやっている部会名は「安全衛生部会」で、「管理」はつけない。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

「ボランティアの」という言葉が入ります。ボランティアの安全衛生部会と防災ボランティアの安全衛生分科会です。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

自主的な研究会は、防災に限らず、ボランティア安全衛生部会で、検討会になるとそこに防災がつくわけですね。それで、部会の研究成果何なりが分科会なりその他に反映されるようにします。そういう関係にあることが第1番の確認点ですね。

2番めは、先ほどの成果物の議論ですね。ボランティア安全衛生部会が作った成果物は部会に帰属しており、分科会なり内閣府がどう活用するかは別問題になるという理解でいいですね。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

部会がそれを活用していいとおっしゃった場合に限ります。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

別途検討する必要があるだろうということを今回話し合ったということですね。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

次は、その成果物の性格ですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、今回は分科会の報告だから、研究会ではなくて、分科会としては防災ボランティア活動上に役立つ安全衛生に限定するわけですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

クレジット辺りの話まではするけれど、そこはあまりうたわなくてもいいと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

では、今の話はなし。具体的な成果物としては指導者向けとリーダー向けのものをまずやって、そのうえでさらに具体的な分野として、寒冷環境におけるボランティア活動の安全衛生についてのマニュアルを、次に何を作るかは決めていないけれども、まずは作るということですね。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

次はそれを集約して行って、災害ボランティア活動の安全衛生何々でしょう。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

まだそこまでいかないで、その途中経過として10月の安全安心まちづくりにちょっと触れましょう。

藤田（政策統括官付参事官付主査）

それより、単に寒冷地のかたがたの意見も伺ってきますという言い方にしたらどうですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そうですね。10月に寒冷地の意見を聞くということですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

寒冷地の次に何を作るかという議論はしなかったような気がします。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

もともとはNファイルをちゃんと作っていくということがあります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

アメリカのカトリーナの被害は、勉強の素材として洙田さん、岡野谷さん翻訳ということで。

それから、寒冷地のマニュアルは、雪害に限定するものではないということで、寒冷地ではなく寒冷環境のマニュアルとして、10月に寒冷地の意見を聞いて作ります。ところで、いつまでにということは決めたのですか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

11月末が普通ではないですか。スケジュールを決めないと本当に進めませんが、本当に月いちで部会をやるのですか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）

最低月いちでしょう。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

安全衛生部会のメーリングリストを作れることをオーソライズするということをここに入れないと、スタートできません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それは独自のメーリングリストですか。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

検討会ではできないでしょう。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

安全衛生部会独自メーリングリストを作れるということは、自主的なメーリングリストでいいですよ。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

安全衛生部会のメーリングリストには、検討会のメンバー以外の人間も入ることができます。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

この確認は重要だと思います。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そして、その報告を検討会にすることはあります。検討会の意見を伺ったら、それを安全衛生部会に落とすこともできます。でも、それをかってに共有するのはだめということをこの間少し話しました。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

あくまでも著作権は部会にあるという発想でしょう。極論すれば、分科会は話し合いの場ですよ。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）

どちらもそうですが、安全衛生部会に入っていない人たちも検討会には入るわけです。もちろんご意見を聞くことは私もやりたいと思いますが、それは一つステップを置きます。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それで、寒冷環境のマニュアルを作ったうえで、基本的な災害ボランティアの安全衛生マニュアルづくりを展望することになりますか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
それがいちばんいい表現でしょうね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
費用の話はしますか。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
訴えかけるという意味でしましょう。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
ちょっと議論がずれるかもしれませんが、助成金をもらうという議論は、部会が自主的に動いてもらえばいい話で、別に縛られる話ではないですよ。自主的な研究会の部会が何らかの研究をやるに当たって、助成金を取ったり、費用をもらうのは自由ですよ。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
では、今のような澤野さんの報告を全体会でしていただくということで、まとめはよろしいですね。お願いします。

スケジュールとしては部会を最低月1回やっていくということです。洙田さんはメーリングリスト参加で、予算がつくときに極力上京していただくことにします。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
洙田さん、東京に呼ばれる会議などはありませんか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
もしそういう機会があれば、そのときに部会を合わせるなど、臨時部会を設けるという形で対応します。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
場所は中川君のところや市川さんのところということで、スペースはお金をかけずに用意ができます。資金面でも非常に助かります。

洙田（医師/労働衛生コンサルタント）
部会の会計はどうしますか。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
会計が必要になるほど資金は、今のところないでしょう。

岡野谷（日本ファーストエイドソサエティ 代表）
検討会で来月の部会をいつにするか決めませんか。そこで皆さんに来てくださいと言えるので。

宇田川（神奈川県災害救援ボランティア支援センター・サポートチーム）
では、9月20日に決めましょう。たたき台の材料を出し合っていくことが必要ですから、それまではぜひメーリングリスト上で活発に問題点の抽出だけばんぼんやってください。よろしくお願いします。以上で終

わります。ありがとうございました。